

その行為、子どもの育ちにとってプラスになりますか？

こうちよう　ながの　ひでき
校長　長野　秀樹

わが子を困らせたくない。困っていれば助ける。これは、親として当然のことだと思えます。

ところで、「これって、子どもの育ちにとってどうなのか？」と気になることがあります。

その一つは、親が子どもの忘れ物を学校に届けることです。

もう一つは、雨風が強かったり、脚をけがして歩行が困難だったりするなど特別な理由がないのに、登校時に車で子どもを送ることです。

これらのことが、子どもの育ちにとって、プラスになっていけばよいのですが・・・。

江戸時代の本草学者である貝原益軒の養生訓に「小児（しょうに）をそだつるは、三分（さんぶ）の飢（うえ）と寒（かん）とを存（そん）すべしと、古人（こじん）いへり。いふ意（こころ）は、小児（しょうに）はすこし、うやし（飢）、少（すこし）ひやすべしとなり。小児（しょうに）にかぎらず、大人（おとな）も亦（また）かくの如（ごと）くすべし」とあります。その意味は、「小児を育てるには、30%の飢えと寒さを与えるのがよいと、古人はいう。そのころは、小児はいつも少し飢え、かつ少し寒いほうがよいということである。これは小児だけでなく、大人も同じである。小児に常に旨いものを食べさせ、厚着をさせて温かくしていたのでは、のちに大きな禍（わざわい）を招くことになる」です。つまり、子どもにとって、困難な場面で我慢したり、わがままが通らなかつたりする経験はとても大切だということを示しています。

私たち大人が、子どもの将来を見据え、『かわいい子』だからこそ将来たくましく生きることのできる力を育てることが大事なのではないでしょうか。

忘れ物についていえば、「子どもが困るから・・・」という考えで届けるのではなく、子どもの将来を見据えて、今のうちに、『前日に明日の準備をする』という習慣を身に付けさせることが、大切なことだと考えます。

貝原益軒の示唆に富む言葉を、私も肝に銘じたいと思います。皆様もどうか我が家に置き換えて考えてみてください。